

第2次世界大戦期の軍事教育映画における専門知識の映像化について

関西大学 雪村まゆみ

【1. 目的】

ほとんどの商業アニメーションは分業体制で制作されており、多くのアニメーターがその作画工程に従事している。このような組織的制作は第2次世界大戦期に端を発している。戦時期、アニメーターは日本初の長編アニメーション『桃太郎の海鷲』（1942）の制作を筆頭にプロパガンダ映画のみならず、軍事教育映画においてもシミュレーション映像や図解の専門職として動員された（雪村 2007）。実際、軍事教育映画は、同時期に制作された物語アニメーションの約2倍の長さが制作されているが（Clements et.al, 2012）、これまでの研究において、軍事教育映画についてはほとんど着目されてこなかった。そこで、本報告では、軍事教育映画に焦点をあて、動きを用いた解説方法を活用するという発想がいかにして生み出されたのか、専門知識の映像化が意味することについて考察することを目的とする。

【2. 方法】

戦時期に制作された軍事教育映画の現物フィルムは現存しないが、文化庁の日本映画情報システムにおいて、東宝航空教育資料製作所が制作した映画一覧を確認することができる。また、国立国会図書館憲政資料室所蔵の軍事教育映画に関する資料、とりわけ、アメリカから返還された日独両国の陸海軍軍用機の技術情報が収められたフィルムに添付されていた『爆撃教育用映画取り扱い説明書』と題された資料が現存し、それらから制作主体や制作時期、またシナリオを読み取ることができる。また、東宝の特殊技術課線画係に配属された鷺巣富雄（うしおそうじ）のインタビュー録や自伝、アニメーターの山本早苗の回顧録などから、当時の軍事教育映画制作の実態を明らかにする。

【3. 結果および結論】

映像の現物が不在による内容分析の限界があるが、『爆撃教育用映画取り扱い説明書』と題された資料（製作年月：昭和16年6月 - 昭和18年3月、企画：海軍航空本部、製作指導：鈴鹿海軍航空隊、製作：東宝映画株式会社特別映画班）から、軍事教育映画の形式は、特定の機器に関する専門的な解説で構成されていることがわかる。シナリオを分析することで、高度な数学的知識に基づく解説を視覚的に分かりやすく説明するためにアニメーションの図解が活用されたと推察できる。また制作に従事したのは、アニメーションの作画を担当するアニメーターだけでなく、特撮を専門的に行う技術者であり、「物の動きを忠実に再現する」ことが求められた。軍事の専門知識に関して「動く映像」を用いて、わかりやすく解説することによって、多くの人材を養成していくことが可能になると考えられた。この点に関しては、アンリ・ルフェーブルが「視覚化の論理」として映像の技術革新を批判的に分析しているが、わかりやすさを重視する価値の背後には、国家が大衆を教化するという方向性が隠蔽されているといえる。

参考文献

Jonathan Clements and Barry Ip, 2012, "The Shadow Staff: Japanese Animators in the Toho Aviation Education Materials Production Office 1939-1945", *Animation: An Interdisciplinary Journal*, 7(2): 189-204.

Lefebvre Henri, 1974, *La Production de l'espace*, Economica (=2000, 斎藤日出治訳『空間の生産』青木書店)

雪村まゆみ, 2007, 「戦争とアニメーション—職業としてのアニメーターの誕生プロセスについての考察から」『ソシオロジ』52(1): 87 - 102.